幼児の教育　第94巻　第４号　平成７年４月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

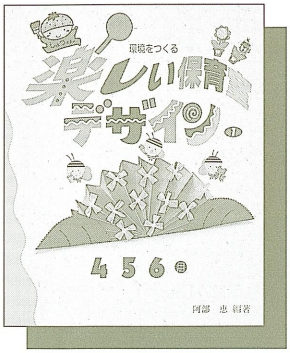
幼児の教育

1995

4

日本女子大学
平成
7.2.23
受入
附属図書館

第94巻　第４号　日本幼稚園協会



環境をつくる 楽しい保育室デザイン ①

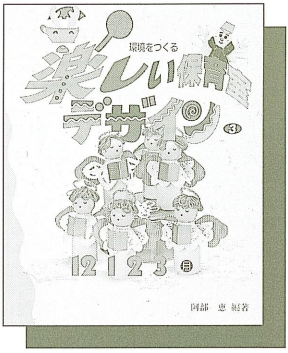
4・5・6月

楽しい保育室から楽しい保育へ。新学期に必要な誕生表や案内標示、くつ箱やロッカーをわかりやすく飾りつけるアイデアを盛り込みました。また、プレゼントやワンポイント的に生きてくるアイデア飾りも各月別に、かわいいモチーフで作りました。オールカラー・型紙付。

環境をつくる 楽しい保育室デザイン ②

7・8・9・10・11月

暑い季節は、涼感を呼ぶ室内飾りが何より。季節感を大切にした室内飾りのアイデアをワンポイント飾り、壁面飾り、コーナー飾り、おすすめアイデア飾りにしぼって、提案します。赤ちゃん向きと、幼児向きのバリエーションなど細かい配慮もしています。オールカラー・型紙付。



環境をつくる 楽しい保育室デザイン ③

12・1・2・3月

12月はクリスマス会などのパーティーグッズのアイデア、3月は卒園を祝う飾りや、プレゼントのアイデアを加えました。各月のどのアイデアも、子どもといっしょに作ったり飾ったりできる簡単な作品です。楽しみながら作り、飾って楽しむアイデアの提案です。オールカラー・型紙付。

阿部　恵・編著　AB判・各80頁・オールカラー・型紙2色

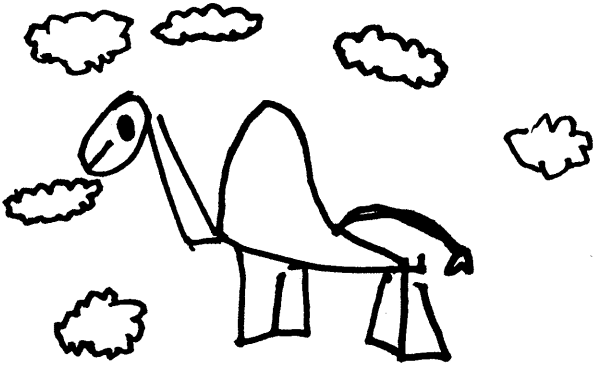
定価各 2,300円（本体 2,233円）セット定価 6,900円（本体 6,699円）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第94巻　第４号



幼児の教育　目次

——第九十四巻　第四号——

子供讃歌……（4）

卒業生たちと再会の日に……津守　真……（6）

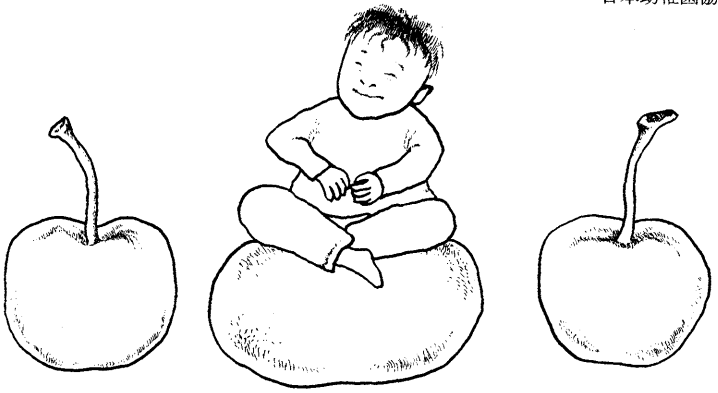
これから……田代　和美……（11）

イギリスからの春の便り……笹川真理子……（16）

トポスにおける発達　第一回……無藤　隆……（24）

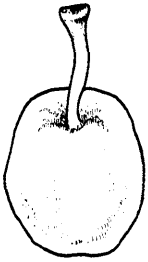
幼児の自己を支えるには……藤崎眞知代……（32）

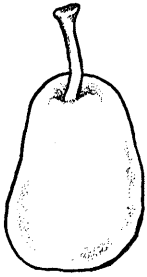
© 1995
日本幼稚園協会



園長室の窓から(1)
消耗教材を考える……原口　純子…（42）
ある日の育児日記から(52)……佐藤　和代…（51）
子どもたちへのまなざし(12)
ある実践研究発表会……松井　とし…（52）
中国のむかしばなし
『なまけもののおかみさん』―烙餅師傅和懶妻―……近藤伊津子・編…（54）
B男のこと……上坂元絵里…（58）

表紙・松永　潤二／扉題字・津守　真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・彌永たたえ
編集委員・田代　和美／本田　和子
桝田　正子・伊集院理子・田中三保子
編集部・大沢　啓子





子供讃歌

お花もニワトリも、みんなともだち

撮影・平野　清

卒業生たちと再会の日に

津守　真

私共の学校では、毎年十二月の末に、卒業生たちが学校に集まる日をつくっている。卒業した子どもたちと再会するたびに、私はその子たちと葛藤しながら過ごした日々を思い起こす。子どもが必要としていることに応えるのには、大人にとって当然の常識的考えを変えなければならないから、そんな時期は毎日が自分との戦いである。そのお陰で保育者も親も自分の世界を広げられて成長する。

そのときのことなど忘れたかのように、卒業した子どもたちが集まってくる。

二十歳の青年Mくんは、千代紙をきれいに貼った小箱を十数個もって来た。そして、自分が気に入った人にあげて回る。みんな女性である。私の脇は通り過ぎていってしまった。この子は、かつて、職員の結婚式の前日に届いたデパートの包みをあけたがった。私は一生懸命にとめたが承知しない。この子は箱の蒐集をしていたから、たいがいの箱ならば私はあげたのだが、若い職員にとって大事な結婚式のお祝いの箱はあげるわけにはいかない。あげくに私は思いついて、同じような箱を探し、包装紙と紐をもって来た。Mくんは、私の手から奪い取るようにして、手際良く包みを作った。気に入った包装紙を貼って箱を作り替えることは、そんなころから始まったことを私は思い出した。手先の器用なMくんがいま作る小箱は、素人ばなれした美しい箱である。

このMくんのことを語るとき、既に本誌でも記したことだが、次のことを述べないわけにいかない。あるときMくんは、職員室の棚の教材を、どうしても保育室にもってゆきたがった。私は一年分のクレヨンや、糊や折り紙を駄目にされたらどうしようかと思い、必死になってとめたがどうしてもきかなかった。そんなにまで望むことには、私には分からない理由があるのだろうと考え、私も手伝って棚の教材を保育室に運んだ。Mくんは絵本ラックから絵本を全部おろして、その教材を分類して並べた。じきに私は、スーパーマーケットを再現していることが分かった。そこに至ってはじめて私共は子どもの考えに気が付く。大人が自分の常識を守ることに固執し始めると、自分とは違う世界を受け入れる余

地がなくなる。Mくんと一緒にいる大人は、いつも予期しなかったことをつきつけられて、自分の世界を広げなければならない葛藤の連続であった。親も私共もMくんのお陰でどれだけ心が広げられたかわからない。

Cくんは、内装専門店で、母親と一緒に働いている。母親の配慮で、午後三時までの勤務としてもらい、好きなことをする時間を多くしている。中でもCくんは町を歩くのが好きである。そうするといろいろなトラブルが起こることは想像に難くない。たとえば、Cくんは給料の中から千円札を小袋に入れて外出し、それを使い切らないと気が済まない。買い物した残りの小銭は喫茶店の募金箱に入れてしまう。一時は募金箱を長い時間いじっているので、金を盗ろうとしているのと間違えられ、警察に補導されたこともあった。今になればそれは募金箱を研究していたのであることが分かるのだが。現在は、ひとりで外出して何も問題はないが、ある時期はお金を払わずに買い物をしたり、蕎麦屋で食べてお金を払わないで出て来たりした。そういうとき、母親はすぐに行ってお金の使い方を教えたり、店員さんと親しくしてCくんに声をかけてもらったり、この子が店での振る舞い方を学ぶように一生懸命になった。私共の学校を卒業した後も、よく店から電話がかかり、職員が助けに出かけた。ことばを話さない子どもが何を考えているのかは、店の人には分かりにくい。どうしても中間に立つ人が必要である。この子によってこの母親が人間的に

成長していく様子が私にもよく分かった。幼児のときから担任をしていたI先生は、この子が小学校を卒業した後にも、トラブルを起こす度に、この子が何を考えているのかを母親と一緒に考えつづけた。

Hくんは、幼児のときから、突然大発作を起こし、自分の身体を快適に維持するのが大変であった。いま、私よりも背が高くなったその子を、父親が面倒を見ているのがこの日印象的であった。食べさせるとき、父親はHくんに合わせて上手にリズムをとってスプーンをこの子の口に運んでいた。私共も同じ苦心をしたのだが、子どもの方もその頃よりも上手にスプーンに自分を合わせている。食事が済むと父親の足元で横になり、両手で紐を引っ張った。自分の仕方で動いていればこの子は幸せなんです、と父親は言った。かつて私もこの子と長時間付き合うのは大変だったが、その「時」には不思議な平和があった。この父親は、この同じ体験をしていた。

この日来ていた別の母親が言った。「学校の先生たちは、歩けない子どもを歩かせてあげようとしたり、車椅子に乗った子どもを介護して、たくさん面白いことをしてあげようと思う。自分の期待から、子どもの頭越しに何かをしてしまう。善意からなのだが、そのために小さなサインを見落としてしまう。その子の気持ちを察しない。普通の人と障害児

とを別の世界において、介護してあげるというのではなくて、皆一緒に生きているのが私たちの生活なのにね」と言って笑った。

＊

最近、子育て支援ということが新聞にもよく言われる。保育施設は何を支援するのか。母親が働くことを支援するのか。それは子育て支援の根本ではない。子どもを育てることを支援するのである。母親が子どもをおいて立ち去れば、幼い子どもは存在の根底を揺るがされる。母親にも葛藤があるだろう。そんなときに子どもの示す行動をどう見るのか、どうかかわるのかを一緒に考えることをしないで、親が働くことを支援するだけでは、子どもの視点からの子育て支援ではない。

ＯＭＥＰ世界大会では、この社会変化の時代に親も子も人間として成長するための「子育て支援行政」をめぐってシンポジウムが行われる。

（愛育養護学校）

これから……

田代　和美

この原稿を書いている一九九四年十二月現在、世の中では毎日、子どもたちのいじめの問題が、とりざたされている。いじめを苦に自殺をする子どもたちが相次ぐ中で、私たち大人はこれから何をどうしていこうとしているのだろうか。とりあえずの対症療法もいろいろと提唱されている。そんなことでは問題は解決はしない。しかし、それをしないと現時点では子どもの命は救えない。これは非常事態である。数年後に「あの時にも……」、という話に二度となってはならない。

「大人になればきっといいことがあるから、子どもたちよ死んではいけない」。今、このようなメッセージも子どもたちに発せられて

いる。子ども時代というのは人が生きていく上での糧をたくわえていくような時間ではなかったのだろうか。子どもたちのためという名目で、大人たちが子どもに対してしてきたことは、一体何だったのだろうか。他人より少しでも早く、他人より少しでも優っていることを目指して、ゆっくり自分で見つけたり、感じたり、考えたり、試したり、話したりする時間や場をどんどん奪って……。子ども時代の子ども時代たる所以(ゆえん)を奪うことに、大人は力を注いできたのではないだろうか。子ども時代は生活する世界だけが狭く、そこでの価値観は大人の世界そのままの時代になってしまったようだ。

いじめ「対策」が、子どもたちだけをターゲットにするのではなく、大人の社会を見据えないことには、子どもたちがなおさら管理される方向にいかないとも限らない。今の社会を見てみれば、子どもや老人など、ハンディを持つ人々にしわ寄せがいっている。それ自体がいじめの構造そのものである。健康な社会ならば、弱い立場の人々がもっともっと過ごし易いはずである。そんな大人の世界の病が子どもたちの中に浸透している。大人はそれを自覚しているのだろうか。そして大人の社会の影響はより幼い人たちにも影を落としている。年齢が低いほど生活している世界は狭く、その狭い世界の中でその病は行き場を失い渦を巻く。保育の世界にとってもこれは対岸の火事ではない。

子どもたちにどうやって一人一人の人間が違うということを、そしてそれぞれが尊い存在であることを実感として分からせるのか。これは人間としてのまさに基本的な部分であ

り、その感覚をなんとなく分からせることが保育の果たす役割であろうと思う。このなんとなくというところが、難しいところであるが、しかし人間としての基本的な部分は理屈ではなく実感として分かることの方が多い。

ある時、幼稚園の先生方と自信の持てない子どもの話をしていた時に、具体的な対応については様々な考えが出され、相当な意見の対立や解釈の違いがあったが、その中で「私自身は人間の生き方の基本的な部分は幼児教育でなんとなく分かってほしいなと思って教育している部分があるのね、意識的に」という言葉には皆がうなずいた。そしてまた、「僕がここにいる、私がここにいるっていうことを大々的にアピールできるっていうことは、子どもにとって基本的に大事なことなのよね。自信もへったくれもなくて、そこから始まるのよね」という言葉にも一同がうなずいた。子どもの喜びを自分の喜びとして感じられる感性を持っているからこそ、子どもが喜びを感じることのできる状況が蝕まれていきつつあることを、保育に携わる人々は五感を通して感じている。そして人間として基本的な部分、これを育てていくことを切に願う保育者たちの思いが感じられる。

しかしそういう状況であっても、遊んでいる子どもたちの姿を見ていると、子どもたちの楽しみや喜び、そして悲しみや悔しさなどの経験の質は、時代や環境が変わっても変わらないものだと実感できる。何をも疑わない確かな存在感と今を生きている喜びを身体中で示している子どもたちの集団。そして、保育する楽しさを感じている保育者。この両者のかかわりの中で、それぞれの子どもたちの

中に人間として基本的な部分が育っていくのだろうと思う。子どもたちの本質は変わっていない。それを保証していけるかどうかは大人の責任なのである。希望を失っては保育は営めないし、保育という営みが、未来の健全な世の中をつくる一端を担っている仕事なのだという自覚をもちたい。

そして困難に立ち向かいながらも、その大変さを子どもたちに感じさせることなく、一緒に楽しむことが求められている。なんだか、今の保育者って戦時下の保育者みたいだなと時折思うことさえある。先の幼稚園の先生方との話の中では「〜ねばならないと思っている時って、たいてい有効打を打っていないじゃない」という話もでた。それも真実であろう。子どもたちと共に楽しみながら大人としての役割と責任を果たすということの難しさはここにもあるのかもしれない。

本誌が発刊された明治時代から大正・昭和・平成と時は流れ、冒頭に書いたような現在にいたり、でも本誌の中で大切にしてきたことは、時代の流れに棹さすことなく脈々と続いてきた。本誌の昨年四月号に本田和子先生が書かれているように、本誌の創刊当初にうたわれた「子どもと共に語り、共に歌い、共に遊ぶ」ことの意味は、ますます強化・確認され、普遍的な理念と化している。そして子どもたちの育つ環境が悪化し、それが、ますます必要性を増している。この三月で本田先生がお茶の水女子大学をやめられ、これから私が本誌を受け継ぐにあたって、これからもそのような保育の実現に向けて、保育のことを真摯に考え続けている人々と一緒にこの雑

誌を作っていきたいと今、思いを新たにしている。ゆっくり読み、味わいながらゆっくり考えられるような時間と空間を、日々忙しさに追われる大人たちに本誌を通して提供することができるように、そして、書かれたものに対する異論や反論など様々な考えを出し合える、そんな場として本誌が存在することができるようにこれから未熟ながらも努めていきたい。

（お茶の水女子大学生活科学部）

イギリスからの春の便り

笹川　真理子

イギリスでは「三月の風と四月の雨が五月の花をもたらす」というのが、季節を表すことわざとして有名です。しかし自然のなせる業なので、年によって違いがあり、昨年などは五月に雨ばかりで、花が例年より一か月遅かったこともありますが、概ねそんな気持ちで春を待ちます。

イギリスと言っても北アイルランド、スコットランド、ウェールズそしてイングランドという、地方というより小国から成り立っている英国では、それぞれの地域に守護聖人がいて、三月一日はセント・デーヴィス・デーというウェールズの守護聖人を祭る日。我が家では夫がウェールズ出身なので、この

日が結婚記念日です。ちょうどあちこちで水仙が咲き乱れる頃でもあり、この日、ウェールズの人達は胸にウェールズの花、水仙をさして誇らしげです。

また、三月一七日はアイルランドの守護聖人セント・パトリックを祭る日。アイルランドの人達はクローバーを胸に飾り、緑色の洋服を着るなどして愛国心を表します。そして

▲緑色の服を着て、頭には花で飾った帽子を

この日はアイルランドの誇るべき飲物、ギネスが格安の値段でパブで振る舞われ、本土アイルランドやアイルランド移民の多いアメリカでは、大掛かりなパレードが行われます。

日本では春分の日を境に春と感じるのでしょうが、イギリスでは春分の日の次の日曜日、今年は三月二六日に始まる夏時間から、いよいよ日照時間も伸びてくるようでワクワクします。冬時間から夏時間になる時には、一時間早起きしなければならないわけですが、この切り替えはいつも日曜日にあり、うっかりしてもビジネスのアポイントメントにはあまり差し支えがないように工夫されています。

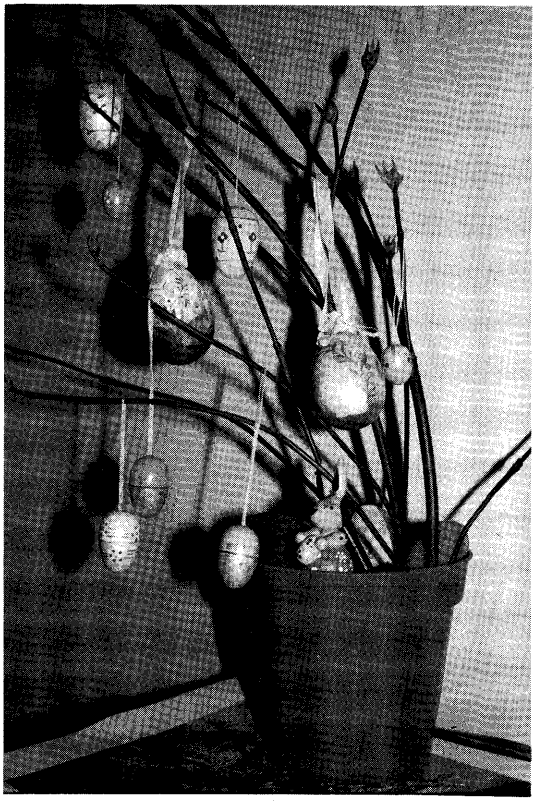
まだ寒い内から可憐な姿を見せていたスノードロップに取って代わって、そこかしこには、クロッカスがかわいらしい頭をもたげてきます。そして水仙の黄色とムスカリやスミレのブルーやパープルが鮮やかなコントラストを描くようになると、本当に春の訪れを自然の中に見る思いがするのです。

今年は四月一六日に当たるイースターはそんな春の祭典。クリスマスにクリスマス・ツリーを飾るように、枯枝に色とりどりのイースター・エッグを吊り下げてイースターを迎えます。イースター・カードはもちろん、多産の象徴である兎や再生のシンボルである卵の形のチョコレートを贈るのも習慣。日本ではバレンタイン・デーにあやかって、三月のホワイト・デーがチョコレート会社の思惑で作り出されましたが、キリスト教の伝統のある国々では、バレンタインデーの次にはこのイースターが控えているため心配ご無用。

本屋のショーウインドーに「ピーター・ラビット」が登場するのもこの頃です。当日は、あちこちでイースター・ハット・コンテ

スト、イースター・エッグ・ハントなど楽しい催しが行われます。しかし何と言っても圧巻は、イースター・サンデーにロンドンのテムズ河南岸にあるバタシー公園で繰り広げられるイースター・パレード。工夫を凝らした山車(だし)の数々に、親子連れが歓声をあげます。

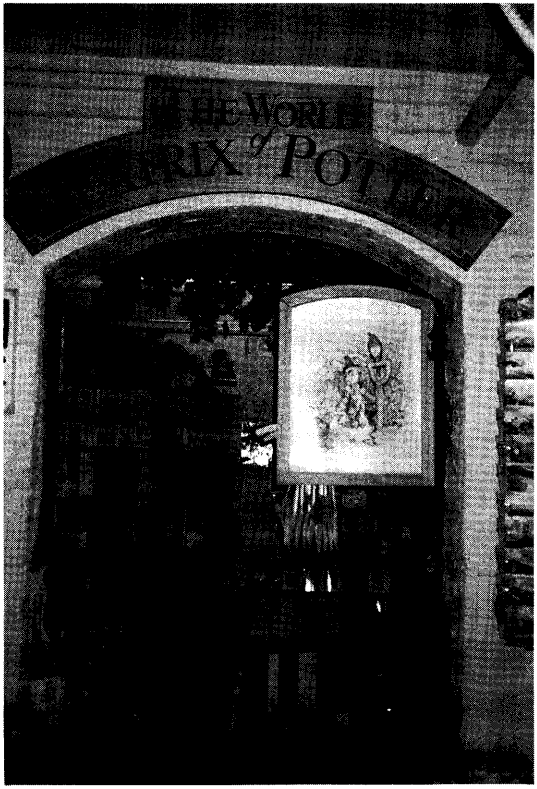
また、イースター休暇になるとなぜか思い出さずにはいられないのが、イソップの「ア



▲イースター・エッグ

リとキリギリス」のお話です。日本人はあくせくと働きバチのようだとたとえられますが、イースター休暇中のイギリスの日本人は、どうしてもキリギリス。この機会にと、あちらこちらへとドライブや旅行に出掛け浮かれる姿が見られます。

一方イギリス人はというと、もちろん旅行をする人もいますが、たいていは額に汗し、



▲ピーター・ラビットの小物コーナー

土にまみれてガーデニングに勤しむアリとなるのです。冬の間に傷んだ樹木の手入れをし、土を耕し、肥料を入れ、種を蒔き……。この期間にイギリス人が群がる所は、ガーデンセンターと、相場が決まっています。この努力があってこそ、夏の美しい庭が演出できるのです。

ロンドンには幸い日本食糧品店が多くあり、お金を出せば何でも手に入りますが、私は食いしんぼう（節約家でもある?）。プランターでできるシソや三つ葉は言うに及ばず、ミョウガ、フキ、カボチャ、エダマメ、ソラマメ、ニラ、ゴボウ、カブなどを家庭菜園で栽培しています。これらの収穫を夢見て、春には畑仕事です。春の味覚、山菜の中でもわらびは、ロンドンのリッチモンド・パークにニョキニョキと生えるので有名。もちろんイギリス人にはその貴重さはわからないでしょう。

どちらかと言うと季節の食べ物に鈍感に見えるイギリス人にとっての春のごちそうと言えば、まずイースター前の精進期間の前日、シュローブ・チューズデーに食べるパンケーキかもしれません。四〇日間、肉やミルク、卵などを断つため、その前にこれらを処分してしまおうとできた習慣なのです。ホットケーキと言うよりはクレープのように薄いので、何枚でもおなかに入ります。

一五世紀頃、パンケーキを焼いていた主婦が礼拝の鐘を聞いて、フライパンを片手に教会に急いだことに端を発しているパンケーキ・レースが、ロンドンの中心コベント・ガーデンで開催されて、人々を楽しませています。

いよいよイースターが近づいてくると、ホット・クロス・バンの良い香りがパン屋さんから漂ってきます。これは、白い十字のつ

いた甘いパンのこと。もともとアングロ・サクソン人が、春分の日に四季を表す十字をパンの上につけたのが、後にはパンの膨らみを妨げる悪霊をはらう印として残されたと言います。今ではグッド・フライデーにホット・クロス・バンを口にして、キリストの苦難を覚えるのが伝統になっています。

このホット・クロス・バンにちなんでイギリス版「岸壁の母」の逸話があるのでご紹介しましょう。

ロンドンのドックランドといえば、水際開発の先端地ですが、ヴィクトリア朝には「日の沈まない」といわれた大英帝国を往来する船の港として大変賑わった所です。そのイースト・エンドと呼ばれるロンドンでも庶民的地域の一角に、船乗りの息子を持つ未亡人が暮らしていました。

ある春浅い頃、イースターに息子が帰るという知らせに、母親はホット・クロス・バンを焼いて待ち侘びました。ところが、息子は帰らぬ人となってしまったのです。それでも母は毎年息子を思い、ホット・クロス・バンを焼いて待ち続けたのです。時がたち、一八六五年、その未亡人の家の跡にパブができました。その名も「ザ・ウイドーズ・サン」なるパブはいまだに母の愛の伝統を守り続け、毎年一つずつホット・クロス・バンを加えているのです。

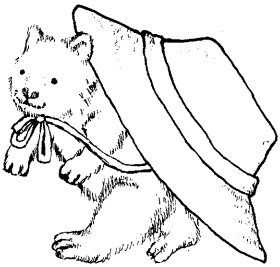
パブに行くと、カウンター脇に、年季の入ったホット・クロス・バンのコレクションが、天井から吊るされているのが目に入ります。ある年は小さく、ある年は平たく大きく、黒く炭化しながらもしっかりと形をとどめるパンには、悲しくも温かい母の愛の結実が見受けられます。店内にはセーラー帽や、船の絵など、海にちなんだデコレーションが

たくさん。グッド・フライデーには大勢のセーラーがやってくるそうなので、一人息子を待っていた母は今では多くの息子に囲まれて、大喜びしていることでしょう。

四月二三日のイングランドのセント・ジョージズ・デーは休日ではなく、日本の春のゴールデンウイークには及びませんが、五月の初めと終わりには、メイ・デー・ホリデーとスプリング・バンク・ホリデーがあって、連休になるようになっています。この頃は田舎の方でメイポールを囲んでダンスが披露され、お祭りが開催されます。花の豊かな季節には、のんびりとピクニックをする家族連れも多くなります。

日本の気候のいい地方からヨーロッパに来ると、冬の闇の暗さに気の滅入る人もあるようなのですが、雪の新潟育ちの私には、イギリスの天候は故郷のものにそっくり。春を待つ心は、土地が変わっても同じと思われます。日本での春は新入学の季節で心も躍る頃ですが、九月が学校の新学年の始まりのイギリスでは、春は社会的状況の変化というより、自然の変化を素直に楽しむ時のようです。

（舞々同人・ロンドン在住）



トポスにおける発達

第１回

無藤　隆

トポスとは場所である。特定の場所との関わりで発達が生じるのだということ、とりわけ小さい子どもの発達はそうだということを論じたい。幼稚園や小さい子どもの出会う環境を念頭に置いて、そこでの子どもの活動から何が生まれるのかを考えることは、幼稚園の環境のあり方、そこにある諸々のものとの関係において子どもが感じ、考えることを丹念にとらえることから可能になる。そのためには、幼児にとっての環境を場所という観点から細分化し、各々の特徴に応じた子どもの活動を記述する必要がある。単に行動を観察することを越えて、そこでの子どもの気持ちを想像的にとらえなければならない。

例えば、砂場で遊ぶ子どもたちを見てみよう。その砂場が何を発達させるのかと問う以前に、砂場に子どもが繰り返し関わる中で何を経験するのかを明らかにすることが必要だ。発達が起こるとしたら、その経験において生ずるはずだからである。

では、その発達とは何か。何が変わるのか。子どもの能力か。性格なのか。子どもの変貌を能力やら性格やらと見なす以前に、子どもが砂場に関わるその質そのものを見る必要がある。能力や性格としての変貌以前にその関わりにまず変化が現れるからである。だがそれ以上に、変化すべきものが子どもにとっての砂場自体の変貌として記述できる。

例えば、砂場はまず砂の感触を楽しむ場である。次に、カップを使ってのままごとの場となる。より丁寧に言えば、カップに砂を入れ、ひっくりかえしたときのきれいな形の見事さや散らばらせるときの細かいものの広がりを形容するものとしての見立てであろうか。さらに、穴やダムを掘ったり、水を入れてダムを作ったりする土木作業としてのごっこが来るだろう。大きな大地が砂場に圧縮されているようである。あるいはまた、深い穴をひたすら掘り、表面の砂をかき混ぜる程度のことを超えて、地面に掘り込む穴となる。全身の力を込めた作業となるだろう。そのような変化が見られたとして、その変化は子どもの何かが変わったことに見合っているにせよ、確実に言えるのは、砂場のありようがその子どもにとって変わったことである。砂場という場所が子どもにとって姿を変貌させたのである。

場所の変貌が最も直接的に現れてくる変化であり、発達があるとしたら、その変化から考えるしかないのである。もっと大きな発達的な変容も、数多くの場所の変貌からなるものとしてとらえることが出来るのかもしれない。少なくとも幼稚園において見える範囲においてはそうであるだろう。

根底的に変貌するのは関わりである。その変貌を主体の側の内的変化に帰属して記述するのか、それとも、客体の側の変容に帰属して記述するのかは論理的には等価である。どちらの記述を行えばさらに論議を進めることができるかで選べばよいことだ。ここでは、できる限り、主体側からの客体への関わりの形として述べるのであるが、特に、それと対応

する対象の側の形の記述を重視するのである。つまり、場所のあり方が関わりを規定し、関わりが場所のある側面を引き出すのである。

本論は、これから何回かをかけて本誌に連載し、幼児がその日常で出会うトポスの中でどのように発達していくのかを考えたい。予定としては、次のような話題を含めたいと思う（本誌の連載でカバーできる量かどうかは別として）。今回は「場所」とは何かを、現象学的な地理学の議論に学びながら、幼稚園の環境と結び付けたい。今後は次の通り。

場所における行為感覚／言葉の原型としての身体感覚／遊び場の持つ動線のあり方／リアリティとしての素材／場所を作り出すものとしての材料／感覚の延長としての道具／植物に親しみ育てる／動物への関わり／遊具の持つ意味／密やかな場所・自分の場所／場における仲間／場所を広げるものとしての道／場所を超える場としてのメディア（絵本とテレビ）／場所を形成する小さな文化／場所を満たす情動的雰囲気／場所を深める懐かしさ。

場所とは何か

現象学的地理学の成果は既に多くの人の知るところだ（中でも、トゥアン『トポフィリア』せりか書房）。ここでは、その中でも特に顕著な業績として知られる、レルフ『場所の現象学』筑摩書房、によりながら、場所の意味を考えていきたい。そして、随時、幼稚園なり小さい子どもの問題に引き移していきたいと思う。レルフの議論の単なる紹介ではなく、幼児にとって環境を考えるという私の姿勢に響き合う点を取り出したいのである。定義を明示し、その上で展開すること自体が重要なのではない。場所の定義を構成する、もっと簡単な概念というものはない。最も根本的なものが場所ということなのだから、どんな定義もその意味を言い替えることに過ぎない。定義ではなく、特徴づけが大事であり、我々が幼児に関わる中で経験することを指示し、喚

起することが必要なのである。

初めの定義としてはこのようなところだろうか。すなわち、場所とは、人にとって物理的に・心理的に・文化的・社会的にまとまりを持った空間であり、特定の物・人・活動を一つのセットとして担い、その場所に関わる者にとってある特定の思いや感じを喚起する。世界はそのような場所の集まりであると同時に、場所性が豊かであったり、乏しかったりする濃密さのパターンでもある。単に眺める場合もあるが、多くは、その中で心身的に関わり、活動・行動することで場所として生きたものになる。

「人間的であるということは、意味のある場所で満たされた世界で生活することである。つまり人間的であるということは、自らの場所を持ち、また知るということである」（P．2）。すなわち、場所とは人のあり方の根元と結びつくものである。子どもの成長が十全のものとなるには、子どもにとって場所が成り立たねばならない。子どもにとっての意味が実現しなければならない。では、意味とは何なのか。簡単に述べるのは無理である。その意味の記述は本稿全体を費やしてやっと垣間見えることが可能になるものである。

場所と空間

レルフは場所を構成する以前の基底にあるいくつかの空間のあり方を弁別して述べている。その内のいくつかは特に幼児にとって重要だろう。

一、原初的空間

「私たちが常日頃さしたる考えもなく行動し生活している本能的な行動と無意識の空間である」。「幼児期にはじまる基礎的な個人経験によって無意識のうちに構造化されており、からだの動きや感覚と関連づけられている。左と右、上と下、前と後、手の届く範囲と届かない範囲、聞こえる範囲と聞こえない範囲、目に見える範囲と見えない範囲、といった基礎的な次元を与えているのが、これらの経験であ

る」（P．15）。このからだの動きに即した空間が最も基本にある。これは場所が成り立つ前提だ。この検討はレルフは行っていないので、次の稿でしたいと思う。

二、知覚空間

「知覚空間は即時的な欲求や実践を中心とする行動の空間」（P．17）であり、「また大地や、海、空といった空間や、人工的に作られた空間との直接の感情的な出会いの空間でもある」（P．18）。単に見たり聞くだけでなく、出会いや体験が成り立つ空間である。そこから、知覚空間は場所にと変貌していく。

三、実存空間

「ある文化集団の構成員として私たちが世界を具体的に経験するなかで明らかになるような空間の内的構造である」。「単に体験されることを待っているような受動的な空間ではなく、人間活動によって常に創造され作り変えられている空間である」（P．22）。一方で、幼稚園の空間は明らかに独自の文化的特性を持っている。幼稚園自体が文化的所産であり、独自の配置や道具を持ち、一定の教育を経た保育者により組織されている。だが、その空間はその中にいれば自然に体験されるというものではなく、

子どもが積極的に使い、関わらなければ生きたものにならないのである。子どもがどう活動するのかを一緒に分析しなければ、場所はとらえられない。だが、空間的な配置は一定の活動を予期するものでもある。

四、地理的空間

「ある特定の文化において意義を持つ空間であり、場所に名まえをつけることや、人間にとっての質、および人類の必要により良く役立つようにつくり変えることなどによって人間化されている」（P．28）。「実際の経験は、視覚、聴覚、嗅覚、現在の状況と目的、過去の経験と関係、こみあげてくる追憶、私たちが建物や景観を評価するところの多様な文化的審美的規準、などの全体的な複合から構成される。農夫にとって田舎の空間は、第一に農場の範囲、農地のながめ、市場への通路である。それらはすべて、永続するが季節的に変化する複合体として経験される」（P．30）。子どもにとって同様に、その必要性・使い方によって場所は作り変えられ、それにさらにすべての感覚、これまでの経験、などが複合されていく。それが安定して成立するとき場所と呼ばれる。

五、諸空間間の関連

「私たちが場所として区別しているところのこうした空間の諸側面は、私たちの意志を引きつけ、集中させてきたことによって多様に分化している。そしてこの集中によって、場所はまだその周囲の空間の一部でありながらも、そこから分離している。しかし空間の意味、とくに生きられた空間の意味は、直接経験された実存的および知覚的な場所に由来している」（P．47）。ハイデッガーの謂わゆる「住まう」ことに場所の本質はある。子どもが幼稚園において暮らし、日々を過ごすこと、その過ごし方における形と経験が場所を構成する。また逆に、場所がその形と経験を規定するのである。

場所の感覚

場所を具体的にはどうとらえたらよいのだろうか。だが、レルフは明確なとらえ方を期待することに警告する。「私たちの日常生活においては、場所は、単に位置や外見によって記述できるような独立した明確に定義される実体としては経験されない。むしろそれは、場所をとりまく背景、景観、儀式、日常の仕事、他の人々、個人的体験、家庭への配慮とかかわりなどが渾然一体となった状況において、そしてまた他の状況との関連の中で感じられるものである」（P．49）。もちろん、「場所は物理的視覚的な形態、つまり景観を持つ」（P．52）。だが同時に、時間的に変化する中でなおかつ同じ場所でありうるものである。「愛着には、永くなじんでいるというような感覚がしみこんでいるので、愛着が強まると、たとえ周囲の世界が変化しても、この場所がこれまで持続したし、将来もまたひとつの実体として永続するだろうと感じるようになる」（P．54）。どのような見かけであるかは大事な場所の要素だが、そこに馴染むことを通して、より深いものを場所として感じとるようになる。それが場所への愛着であり、それにより見かけの変化を超えての場所の持続性を成り立たせることになる。

だからといって、見かけがどうでもよいということではないだろう。場所という見方はむしろ見かけ自体の深さを言っているのである。特定の形や配置や形態が重要なのである。丁度、愛する人の顔かたちが掛け替えのないものでありながら、歳を経て随分と変わっても愛着を覚え、それはまさに、歳を取ったその顔かたちに変わらぬものを見いだすのである。愛着はその愛する形を離れることは出来ない。時間の変容に耐えて同じ形そのものではないにせよ、同じ形の変貌した姿を見いだすのである。

場所は個人的なものである。「重要なのは、この場所がかけがえのないプライベートなその人自身のものだ、という感覚である」。「トポフィリア」、す

なわち非常に個人的で奥深い意義を持つ場所との出会い」（P．65）が、場所をその人にとっての場所とするのである。「私たちの場所の経験には、社会の一員としても個人としても、この特別な場所に対する緊密な愛着、つまりここを知ることと、ここで知られることの一部である親近感を伴うことが多い。私たちの『根もと』を構成するのはこの愛着である。そしてそれに伴う親近感は、詳しい知識を持っているということではなく、その場所に対する深い配慮とかかわりの感覚である」（P．65－66）。

子どもは幼稚園において根付くという感覚を持つのであろうか。そこに馴染み親しくなれば、そこに根をつけ、そこにあるすべてのものを味わい、吸収するのであろうか。根付くとはそこに安定していることであり、安定したところから、まわりを眺め、歩み出て、安定した場を広げていくことである。単に安定した気持ちになるのでなく、好きになり、関わろうとし、相手となるものの特徴に応じて、関わりを変えつつ、働きかけるのである。一方的に働きかけるのではなく、相手からの働きかけを予期し、好ましい対応関係を築こうとすることである。知ると同時に知られるとはそのことを指す。私が相手を見るだけでなく、相手も私を見る。相手とは人のみならず、動物でもいや遊具でもよい。親しみとは私が感じると同時に、相手の持つ特性となるからである。「さあ、遊ぼう」と呼びかけるのは、人もおもちゃも同じである。

場所を知り、関わるとは、その中に入り、所属し、自らを開き、意味を感じとっていくことである。その深い一体感から生じる感覚、それを場所に対する本物の“authentic”な感覚と呼ぶことが出来る。その感覚の発生の問題、それがトポスにおける発達の問題であり、幼稚園の保育の問題である。

（お茶の水女子大学生活科学部）

幼児の自己を支えるには

藤崎　眞知代

はじめに

まず、筆者が居合わせた年長児の一つのエピソードを紹介しよう。

園庭の花壇の苺が色づいてきた。年長になってやっと動きだしてきたA子が保育者に小さな声で「苺、取ってもいい？」と尋ねる。「一つだけね」と言われると、嬉しそうに花壇に走って行った。それからしばらくして、身体を左右にゆったり揺すりながらニコニコして歩いてくるA子に「美味しかった？」と声をかけると、「うん」とうなずく。

この様子を見ていたB子は勢いよく保育者のところに走って行き「私も苺を取っていい？」と聞く。保育者の「一つね」という言葉に、くるりと向きを変え花壇に突進する。花壇ではA男も同じように食べごろの粒を捜していた。じきにA男は気に入った

粒を見つけ、保育者に言われたように洗って食べる。一方、B子は苺棚を覗きこむがなかなか気に入った粒が見つからない。奥の方にやっと見つけ取ろうとすると、無理な姿勢で転んでしまう。近くにいた筆者に、「あれ、取って！」と言う。そこで取って渡すと、すぐに口に入れてしまう。その素早さに驚きながらも「美味しかった？」と聞くと、「すっぱーい！」とにらみつけるようにして言う。その時、傍らにいたA男は「僕のは甘かったよ！」と声をはずませ、けげんそうにB子の方を見ていた。

B子の苺は本当にすっぱかったのかも知れない。しかし、園庭の花壇で熟した苺を取って食べることを楽しく経験できたA子とA男に対して、B子の言葉には日頃の心の屈折を読み取る思いがした。

一、「こだわり」をもつ意味

メイ・R[1]は、人間の実存の仕方には、まわりの世界、共にある世界、そして独自の世界の三つの様態があり、人はこの三つの世界に同時に生きているという。

独自の世界とは日常的にいえば、「私にとって…」ということになるだろう。だから、子どもの「だって私は、…のつもりだったのに…」とか、「どうしても僕は、…したいのに…」といった表現には、それぞれの子どもの独自の世界内存在を含んでいる。それはまた、その子なりの「こだわり」ともいえる。前述のエピソードで示したように、同じ行為でも経験される内容が異なるのはそのためでもある。

独自の世界は人とかかわる際の基盤ともなる。「こだわり」をもちつつ、「こだわり」からも自由になれるしなやかさがなければ人との関係がギクシャクしてしまう。そして共にある世界では、二人

が変化することによって出会いが生まれる。それは親子、保育者と子ども、子ども同士の関係のいずれにもいえることである。

こうした独自の世界の内容、例えば何に興味がありやりたいのか、誰と一緒だと自分も仲間も楽しいのか、逆に、何には興味がなく、できればやりたくないと思っているのかなど、自分のことを子どもはどの程度気づいているのだろうか。こうした幼児の自分自身についての捉えに関して、最近筆者が行ってきている研究を紹介しながら、保育とのかかわりを考えてみたい。

二、幼児なりに知っている自分

一人ひとりの子どもと面接し、二人の子の姿が描かれた図版を見せて、「〜ちゃんは、どっちの子に似てるかな」と尋ね、幼児の自己イメージを探ってみた。例えば、走るのが速い子とそれほどでもない子、遊ぶ友だちがたくさんいる子とそれほどでもない子、などである。

年少から年中、年長になるにつれて、自分の能力や人との関係についての自己評価は下がっていく。だが、いずれの年齢においても両親や保育者の評価と比べると、子どもの自己評価は高く、自分について自己中心的に楽観的に捉えている。ところが唯一の例外として、年中児と年長児では、親が考えているほど子どもは母親に受け入れられているとは思っていなかった（藤崎・高田[2]）。

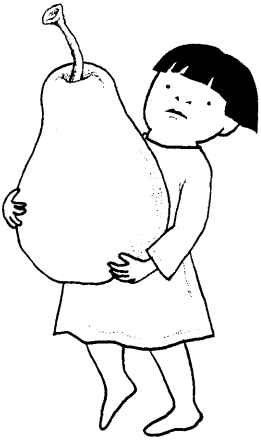
また、大人と仲間では捉え方も違うだろう。年長児についてのみ、「クラスの友だちで走るのが速い女の子（男の子）は誰かな」といったことを尋ね検討してみた。仲間や母親との関係がうまくいっていると思っている子は、他の子から運動は上手だし、色々なことができていると見られていた。つまり、人との関係がコアになって、初めて一人ひとりの仲

間の個性に気づき理解し認めることができるようになっていくと見られる。さらに、何に関心があるかは、日頃の何気ない行動にも現れる。例えば、知的なことに固執している子は、仲間からあまり受け入れてもらえず、人のことを気にしている子は、実際に仲間とうまくいっていないらしい。こうしてみると、幼児は、その年齢なりに自分のことだけでなく、仲間のこともよく見ていることが分かる。

では、子どもは何を手がかりにして自分を知っていくのだろう。シェーネマン[3](Schoeneman.T.)らは、自分で自分を観察して気づく、他の人にいわれて気づく、他の人と比べて気づくという三つの手がかりを上げている。そして、幼児でも自分自身をよく観察することを示しているが、筆者の資料からも、幼児は自己観察を自分を知る手がかりとして最も用いていると推察された(藤崎[4])。

三、自分の内と外の姿

子どもも大人も、誰でも心がはずむ楽しい日もあれば、何か面白くなく気が晴れない日もある。登園してくる子どもの表情や、「おはようございます」の声にも、そうした気持ちが伝わってくる。



日々の保育場面において外に表される行動から、一人ひとりの子どもの内にある自己の様態を探るために、自由に遊んでいる場面の行動を一人について約一〇分間のVTRに撮影した。そして、まず、何をしているのかをエピソード別に分類し、それぞれのエピソードではどのように活動に取り組んでいるか、仲間や保育者に対してどのように働きかけ、応答しているか、また、自慢や批判をどの程度しているか、などについて分析した（藤崎[5]）。

その結果、いずれの年齢でも、自慢したり、仲間を批判したりすることは男児に多く、しかも、自慢する子どもは、仲間にあまり受け入れられていなかった。特に年長では男女児とも自分に自信のない子にこうした行動が多かった。また、年中・年長では穏やかに仲間とやり取りするようになってくるが、そうした子どもは、自分は堅実で安定していると捉えているようだ。

さらに、保育者とのやり取りを見ると、年少児では人との関係だけでなく自分に自信のもてない子が保育者を求めていくのに対して、年長児では人との関係がギクシャクしている子が、そのことを意識して保育者に働きかけていく姿が浮かび上がってくる。このように、子どもが示す自分の内と外の姿には重なる部分が多い。それだけに、その子が示すサインを見逃さずにキャッチし、応えてくれる人の存在は、子どものその後の自己のありように大きな影響を及ぼすことになる。

四、親の姿のインパクト

子どもは色々な人と関係を幾重にもつなぎ、その関係の中で様々な体験をし、個性ある存在へと育っていく。中でも親は子どもにとって影響力の大きな存在である。

例えば、子どもの性別から親がどのようなことを

期待するかには親の価値観が含まれ、それにそっていわゆる「しつけ」がなされる。女児は男児に比べて自分を抑える傾向が強い。それは自己主張よりも自己抑制を女児に期待するしつけが一つの要因となっている（柏木[6]）。

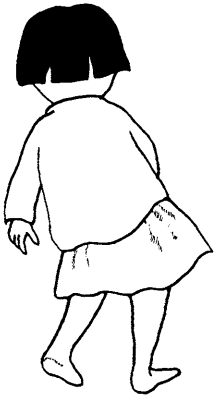
子どもの立場から「しつけ」を捉えると、自分を見失わずに、相手の要求を受け入れると同時に、自分の要求も相手に認めてもらうにはどうしたらよいかを、自分自身で探っていくプロセスといえる。

「女の子だから」と伝統的な玩具を与えられている女児では、知的な面でなかなか自信がもてない。「男の子だから男らしく」という親の願いが強い男児では、母親に受け入れられていないと思ってしまう（藤崎[7]）。つまり、親の伝統的な性役割観が前面に押し出されてしまうと、子どもは自分が本当にありたい姿との間で葛藤する。逆に、母親が自分の経験から伝統的な女性らしさを嫌い、ベタベタすることを好まないにも拘らず、子どもに求められ、母親自身が葛藤することもある。

自分を見つめ性別を越えて個性的なあり方を追求するのは、人としての本来的な営みであり、子どもも大人も常にそのプロセスにある。そして、親子それぞれが今の自分をどのように捉えているかは、日々の生活態度や親子のやり取りにも反映するが、この自分についての捉え方は親子で関連するのだろうか。年長児について検討してみると、母親より父親からの影響を、女児より男児が多く受けていた。特に父親が仕事や家事に自信をもっていると、男児はそれを受けて知的な面で自信があるようだ。父親の影響は女児でも見られ、限られた触れ合いでも父親のインパクトは大きく、親自身が生き生きと自信をもって生活していることがいかに大切であるかを示している（藤崎[4]）。

五、日常保育の中で

保育を参加観察しながら、日頃、漠然と感じていたクラスの印象が、子どもと話して「そういうことだったのか」と、分かってくることがある。例えば、ある園でのことである。年中からもち上がった年長の一クラスは、六月になっても遊びが持続せず、子ども同士のやり取りにも穏やかさ、つながりがあまり感じられない。しかし、もう一つのクラスでは、男女児ともそれぞれの遊びを穏やかに展開しており、子ども同士や保育者とのつながりが伝わってくる。こうしたクラスの違いを感じながら一人ひとりの子どもと話してみた。すると、前者のクラスの子どもは、仲間のことを尋ねても、「知らない」「分かんない」という答えが返ってくるだけでなく、異性や特定の仲間と反発しあっている様子も窺える。一方、後者のクラスの子どもは、ネガティブな感情を表現することはあっても、仲間のよい点も認め合うことができている。これが二クラスの印象の違いだったのかと納得しながら、日常保育の様子に思いを巡らすと、それは「子どもに任せること」への保育者の姿勢の違いに思われた。



また別のある自由保育の幼稚園に伺った時のことである。広い園庭と園舎を子どもは自由に自分の好きな場所でそれぞれに遊んでいる。しかし、人とのつながりが物理的空間の大きさに負けているという印象を残念ながら受けた。そして一日の保育が終わり、クラスの子どもたちが降園していく中で、二～三人の子が保育者とお弁当を広げて食べ始めた。

「一人ひとりの子どもを知るために、こうやって少人数での触れ合いの機会をもっています」という説明に、何か釈然としなかった。その日の保育から人とのつながりが感じられていたならば、この説明の受け止め方も違っていただろう。

日常保育の中で子どもが自分に対して自信をもてるようになるのは、まず子ども自身が自分と向き合わなくてはならない。そのためには、一日の過ごし方から自分で模索し、やりたいことを実現していくための努力を一歩一歩自分で歩むことが基本となる。そのプロセスで保育者から仲間にも目が向き、人との関係の中に自分を位置づける。そして、そうした自分の姿を安心して受け入れられることが自信につながっていくと思われる。

それには、保育者は一人ひとりの子どものありのままの姿を受け止め、支えながら、その子の秘められた個性を見抜き、その子のよいところを気づかせてあげることが大事である。日常と異なる活動や園行事を取り入れると、いつもと違った子どもの面に保育者だけでなく仲間も気づくことはある。そして、何かやれば保育者も楽しく、やったということに満足感を抱きやすい。だが、そうした活動や園行事では、どうしても全体の流れが優先され、一人ひとりの子どもとのやり取りの細部は見落としてしまうことも少なくない。子どもに任せることを基本としながら、どんなに広い園庭、園舎であろうとも、日常保育の中で、一人ひとりの子どもの内と外の姿

を捉えてこそ、自由保育の意味があると考える。

六、時代の親子への働きかけ

一九八〇年代の親は新しい価値観の社会に生まれ育ち、社会への適応にあまり苦労しなかった世代といわれる。それだけに、自分の裁量で物事を取りしきろうとする傾向があり、子育てについても親自身が子どもの人生をよくも悪くもできると考えてしまいがちである（エルキンド[8]）。

このような親世代のあり方は、少子化の傾向と相まって、一人ないしは二人の子育てを確実に成功させるために早くから競争力を身につけさせようという親へのプレッシャーとなっている。学業成績に直接結びつかない「しつけ」に、無関心な親が多いことの一因でもある。子どもはそうした親の期待を敏感に感じ取り、親の価値基準にそったことには意味を見いだすが、そうでないことには自分から取り組もうとしないところがある。例えば、片づけの時など、そうした子どもの一面がよく見えてくる。幼児なりに色々なことができるようになることは、子どもにとっても喜びである。そのことが子どもの生活の中で体験されるように、また、そうした体験を通して子どもが自分自身に自信をもてるように支え、援助することが今日の保育に求められる。

終わりに

年長の二学期ともなれば、就学時健診などで子どもは学校を意識しだす。ごっこ遊びから、幼稚園年長児が抱く学校のイメージは、勉強の時間と休み時間がある、教科書がある、宿題がある、先生が幼稚園ほど優しくない、などである。幼稚園との違いが学校の特徴として強く映るのだろう。未経験ゆえに不安でもあるし、期待したりもする。親だけでなく、子どもも遊びの中で学校を先取りしている印象

を受ける。それだけに、今の生活を充実させ、幼児なりに独自の世界をもった存在として就学を迎えることの大切さを思う。

（群馬大学）

引用文献

(1)メイ・R　一九八六　伊東博・伊東順子（訳）『存在の発見』誠信書房

(2)藤崎眞知代・高田利武　一九九〇「子どもの自己形成に及ぼす社会的比較の影響―（一）幼児の面接資料の分析」日本心理学会第四一回大会発表論文集　P・50

(3)Schoeneman.T.,Tabor.L.,Nash.D.1984"Children's report of the sources of selfknowledge."Journal of personality, P.52, P.125-137.

(4)藤崎眞知代　一九九四「幼児の自己を支え育む保育」（未発表資料）

(5)藤崎眞知代　一九九四「幼児期から児童期におけるコンピテンスの発達―（三）保育場面における行動の年齢変化」日本教育心理学会第三六回総会論文集　P・20

(6)柏木恵子　一九八八『幼児期における「自己」の発達―行動の自己制御機能を中心に』東京大学出版会

(7)藤崎眞知代　一九九一「子どものコンピテンスと行動スタイル―①遊び場面での玩具との関連」日本保育学会第四四回大会研究論文集　P・348～349

(8)エルキンド・D　一九九一　幾島幸子（訳）『ミスエデュケーション―子どもをむしばむ早期教育』大日本図書

◇◇◇◇◇◇園長室の窓から(1)◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

消耗教材を考える

原口　純子

幼児が主体的に環境に関わって、物を作ったり遊んだりするという保育は、教師が中心になって、何かを作らせたり、させていた保育よりはるかに多くの物や材料を必要とします。もし、幼児の〝やりたい思い〟を納得するまで経験させよう、と思ったら、紙類やテープ類、ストローでも割り箸でも底をつくまで使ってしまうことも稀ではありません。

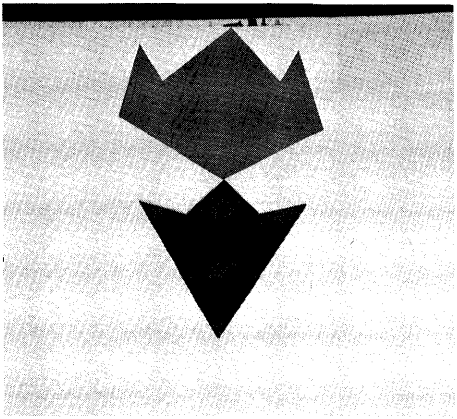
幼児は育ちつつある能力や、自分で作れるようになった物を、習熟するまで、何度でも繰り返し作り続けます。また、イメージに合うまで試行錯誤を重ね、失敗したものを捨てたり、他人にあげたりするので、たくさんの紙やテープなどの材料を消費することは容易に理解されます。

例えばスキップのできるようになった幼児が、どこに行くにもスキップをしているように、また、紙で剣を巻くことのできるようになった幼児が、何本も何本も剣を作ることからもわかります。

かつて、製作帳や貼り絵ワークなどがあった時代は折り紙を一人につき赤と緑を一枚ずつ与え、チューリップと葉っぱの折り方と貼り方を教えました。

教師の意図どおりに仕上がることに目的があったので、無駄と言うか余計にかかる紙ということはなかったのです。しかし同時に、もっと作りたい気持ちも、意欲も、作りたくない気持ちも封じ込めていたともいえましょう。

大人の目にうつる無駄と幼児の成長にとっての必要な消費とを見分けることは大変むずかしいので



▲製作帳に貼ったチューリップ

す。日々山のように出るゴミをながめつつ、経済的な意味合いもあり、ジレンマを感じます。

限られた経費の中で無駄を省きながら、かつ、必要なものはたっぷりと整え、幼児の気持ちに即して、豊かな環境を整えてやりたいと思っているのです。

〈頭の痛い折り紙〉

折り紙(正方形の色のついた紙)をそれぞれの園、又はクラスで、どのように考え、管理しているかは、その園の保育を知るうえで、興味深いことです。

全く置いてもいないし、使うこともない園から、一日一人一枚まで、と使わせてはいるが、強力に管理している園、三〇枚位出しておいて、一日に使い切ったらおしまいの園、使いたい放題出してある園と実に様々です。

折り紙の消費量は園やクラスの保育の質や有り様

▲折り紙でたくさん作る

と深くかかわっているようにも思えます。同じ園の中でも、担任の教師によって、折り紙をたくさん使うクラスと、ほとんど使わないクラスがあります。

出身の短大や養成校にもよるのかもしれません。保育における折り紙依存度の高い所と低い所があるのです。

女児は、他に特にやりたいものが見つからないとき、とりあえず折り紙に手をだし、何枚でもあるだけ使ってしまうことがあります。

もし、砂場で幼児が、じっくり落ち着いて百個のおだんごを作って砂場の縁に並べて、「先生、ぼく百個作った」と満足そうに言ってきたら、教師はその遊びを温かく見守り、その集中力と根気をほめてやることができるのですが、これがもし、折り紙で奴さんを百個作って、机の上に並べて「先生、奴さん百個できた」と言って来た時、教師は温かく見守り、たくさん並んだ奴さんを心から喜んでやることができるでしょうか。もちろんその幼児の固有の問題や状況を抜きに判断はできませんが、一般には一人で百枚も使ったことに内心イライラを感じるのではないでしょうか。

砂場のおだんごは作り終えた後、踏み潰したり、砂場の中に返すことによって、元の状態に戻すことができるのですが、一度使った折り紙は線やしわがついてきたなくなってしまう消耗品なのです。

しかし、砂場の砂は消耗する自覚は無いのですが、年間四立方メートルで三五〇〇〇円位のコストはかかっているのです。一方、普通の十五×十五の折り紙は一枚二円で、一昨年では三二〇〇〇円位購入していますから、トータルとしては、砂場のほうがかかっているともいえるのです。しかし、目の前に見える、奴さんが二〇〇円に相当すると思うとき、教師はやはりたじろぎ、たくさんできた奴さんを素直に喜べない気持ちになるのかも知れません。

折り紙の問題は根深く保育の現場にくいこみ、まだまだ考えなければならない問題をたくさんかかえています。

〈セロハンテープの宝石〉

セロハンテープの出現は幼児の表現や構成の活動を大きく拓きました。それまで、接着はほとんどのりに限られ、素材が紙に限定されていたのです。折り紙や画用紙、のりで立体を作ろうとすれば、プリント教材や製作帳にたよらざるを得なかったという事情も汲み取れます。

さて、この紙はもとより牛乳パックでも、プラスチックでも金属でもねばりついてくれるセロハンテープこそ保育に無くてはならぬものとなっています。また、表面から張り付けるセロハンテープは、裏面にのりをつける作業よりはるかに幼児に分かりやすいのです。

こうして、幼児がセロハンテープを接着に使っているときは、多少要領悪く、たくさん使っていても見逃していられるのですが、新しい使い方をされると教師は急に止めて欲しい気持ちになります。

例えば四歳の女児が三人で、セロハンテープをぐ

りぐりに巻き取って、親指大の玉を作り油性のマーカーで色をつけ、宝石を作り「先生見て、キレイ」と、にぶく光る玉をそれぞれに幼児に見せられると、たいていの教師は「きれいね」と一緒に喜んでやる前に、「アレ！」という困った気持ちになるのではないでしょうか。

幼児がセロハンテープを丸めることはよく見られる遊びです。ちぎっては丸めてままごとのごちそうにしていた幼児や、丸めたセロハンテープの玉にたこ糸をつけて釣り堀ごっこをしていた男児など、幼児が自分で創りだす遊びにはまま見られます。大人にとっては、セロハンテープを丸めておだんごを作る等という、道ならぬ使い方をされるとイライラするし、正しくないという思いや無駄だという価値観から、いたずらとして止めさせたい行為、又は禁じたいものとなります。けれども、セロハンテープで接着以外の使い方があってはいけないのでしょうか。大人が期待する使い方とは少し違っていますが、幼児は創造的にセロハンテープの特徴を生かして、遊びを見つけだしたともいえるのです。

幼児は日々出合う新しい素材や道具を彼らなりのやり方で「あなたはいったいなんですか」と確かめたり、吟味しているのです。もちろん正しい使い方の指導も大切ですが、正しい使い方の名の下に幼児の初々しい発想やイメージ、意欲、面白さ等を根だやしにしてはいないでしょうか。セロハンテープの一巻や二巻をだんごにしたところでたいした問題とも思えないのです。ひと通り経験すれば納得して卒業するのですから。

担任の教師とセロハンテープの玉について話をしてみると、奨励はしないけれど、容認しているとのこと。園長や担任の考え方、許容性によって幼児の持つ経験はかなり違ってきます。ためしたり、失敗したり、無駄をくぐりぬけて育つことも多いのです。

〈コンピュータ用紙〉

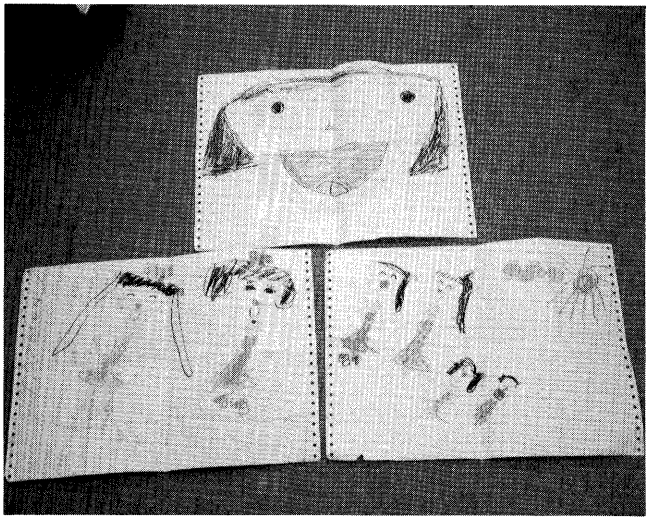
幼児に用いられる消耗教材で紙は主食のようなものです。画用紙、カラー画用紙、模造紙、上質紙など様々な種類の紙が用いられます。

絵は絵を描いたり、鋏で切り抜いたり、のりやセロハンテープでくっつけたり、パンチで穴をあけたり、ホチキスで束ねたり、幼児の力で扱える、イメージを具体化できる素材です。けれども、紙は砂、粘土、積み木のように同じものを繰り返し何度も使うことの難しい、一回きりの消耗品です。絵を描いたり、お面を作ってかぶって遊ぶのには、画用紙も上質紙も抵抗はないのですが、飛行機を折って飛ばしたり、紙鉄砲を作ってならしたり、剣を巻いて戦いごっこをするのに、上等な紙は抵抗があります。

新聞紙や広告の紙なども使いましたが、ここ一〇年程は国の研究機関から廃棄処分のコンピュータ用紙を無料でもらってきています。B4版の大きさで、一箱に二千枚入っています。白く張りのある紙が自由に使えることは大変便利なことです。

さて、便利なコンピュータ用紙を幼児はどのよう

▼コンピュータ用紙を使って



に使っているでしょうか。

1　絵を描く

描きたいという気持ちのある幼児が、紙のあるテーブルにきて、マーカーやクレヨン、鉛筆など好きなものを選んで好きなだけ描いていきます。描いたものは教師が受け取り、名前と日付けを書くようにしています。迷路やマンガのキャラクターを何枚も描くこともありますが、全く制限されることなくイメージを思うままに表現します。一回に三枚も五枚も、もういいというまで描く幼児もいます。丁度先生におしゃべりをして、気持ちが充たされるように、たくさん描いて教師に見て貰えるのは、表現したい気持ちを充たすものとして、幼児にふさわしいものと思います。紙が自由に使えるのは気が楽なものです。

2　折る

B4サイズのコンピュータ用紙は、大きさも紙の質も飛行機や紙鉄砲を折るのに最適です。さまざまな折り方を工夫して飛ばしたり、ならしたりします。その他、蛇腹折にして半分に折り、扇子を作ってジュリアナごっこがはやったこともありました。

封筒作りをした年長の女児のグループも印象深いことでした。五月の下旬に五人の女児がお手紙遊びをしていたので、教師がコンピュータの紙で、封筒を一枚作ったことから、封筒作りが始まりました。紙をたたんで、のりづけし、底をはりつけるだけなのですが、初めはのりづけがうまくできなかったり、底の紙を一枚切り落とすことがわからなかったりと散々苦労していたのですが、出来上がるとそれなりに成就感や満足感のある遊びになり、三日間程メンバーが入れ替わりたち替わりして、封筒作りを楽しんでいました。

3　巻く

何時の頃から、幼児はこんなにも紙を巻いては剣をつくるようになったのでしょうか。どの園に行っても紙の剣を振り回す男の子を見かけます。

以前はブロックで剣を作ったものですが、近頃は紙を巻いたものをよく見かけます。紙質は上質紙や広告紙、コンピュータ用紙のような張りのある薄手の紙が適しています。四歳児の五月六月頃、「先生、剣作って」と何人もの男児が紙を持って教師の所に頼みにきます。一本巻いてテープで止めて渡すと、「もっと」と言って、次々に二、三本ねだります。作ってもらうと喜んで走り去りますが、様子を見ると、しばらくすると、ロッカーに入っていたり、廊下に投げてあったりして有意義に使った様子も見えません。

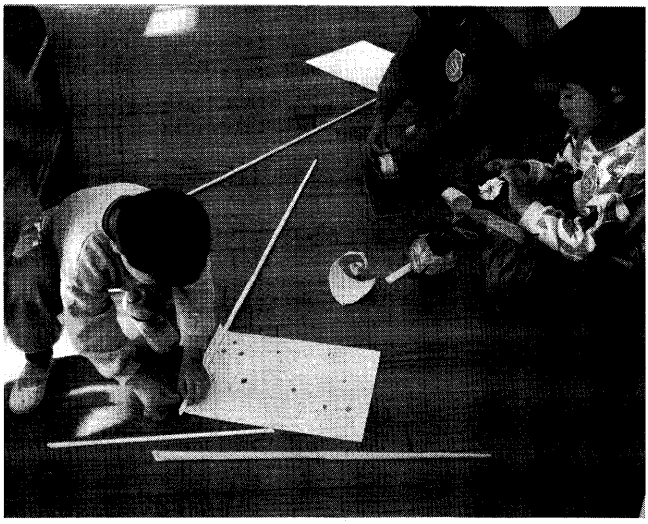
剣作りの意味を考えると次のようなことがわかります。

① 教師と幼児の心のつながりを求めていること

あるとき、次のような例がありました。

毎日、毎日朝から「剣作って」と来るので、前日余裕のある時に二〇本程の剣を作って置いておき、翌日、健一が「剣作って」と来た時にすかさず「はい」と渡したところ、彼は憤然と「だめだよ、これじゃ、ぼくの為に作ってよ」と自分で持ってきたコンピュータ用紙を差し出すのです。ただ剣がほしい

▼細く丈夫な剣作り



わけではなく、先生が目の前で、僕のために時間と労力をかけて作った剣が必要だったのです。この待ち時間が幼児の剣の大切な部分であることが分かりました。しかし出来上がって手にした時はうれしいけれども、剣そのものはもういらないとも考えられます。

② 友だちとのつながりを求め

四歳の男児にとって、テレビのアニメーションのカクレンジャーごっこに仲間入りするのに、ビニールの忍者服と剣は必需品なのです。折れたり曲がったりした物は使い物にならず、毎日毎日新しい剣を作ってもらうのです。

③ 紙巻の技術の上達

毎日教師に頼んで作ってもらうのがじれったくなると、なんとか自分で作るようになるのですが、初めのうちは手先が無器用で、なかなかできません。粘り強い練習の結果上達し、より細く、より堅くできるようになり、教師の巻いたものと遜色のないでき栄えになります。友達に教えたり、作ってやります。剣の持ち手を工夫したり、鞘を作ったり、カラービニールで巻いたり、長く二メートル位につなげて天井につけたり、それなりの工夫や変化は見られますが、所詮、紙を巻いて剣にして振り回すだけの単純な遊びは、もっと面白いグループでの遊びや、サッカー、ドッジボールなどに移行し、年長になるとほとんど作らなくなります。

幼児の遊びはもともと何かの役に立つことを当てにしているわけではありません。砂場の穴掘りも、粘土のおだんごも、面白くて、やりたくてやっている事にこそ意味があるとするならば、この剣作りも、折り紙の遊びも、セロハンテープの宝石も、大人には「無駄」に見える教材を消耗しながら、育っていく何かがあるように思います。

（つくば市立桜幼稚園）

ある日の育児日記から (52)

佐藤　和代

ある夜、有が突然言い出しました。「お散歩、いこ！」お散歩？　まっくらよー、寒いわよー、と説得しても「いきたい」の一点張り。とうとう根負けして、圭と有と三人で出かけました。

さて、どこへ行こう。近くて面白いところ。そうだ、消防署！　有の好きな〝ピーポー〟があるものね。ところが、連れていったとたん、有は入り口にすわりこんで「お散歩いくー」と大泣き。「今、お散歩しているでしょ」「ちがう、お散歩ー」…何が違うの⁇　疑問符をとばしつつ家に帰りましたが、翌日、また夕食後「お散歩、いこ！」です。そしてまた、どこへ行っても「ちがう、お散歩」と泣きだす。一体どうしちゃったの？

謎が解けたのは翌週でした。レンタルビデオの店の前を通ったら、有が看板を指差して「お散歩！」と叫んだのです。これかあ。きっと、私の留守中、敬（お父さん）が「有、散歩行こう」とか何とか言って、レンタルビデオ屋に連れていったのね。有の頭には、お散歩＝レンタルビデオ、と、しっかりインプットされてしまったんだ。

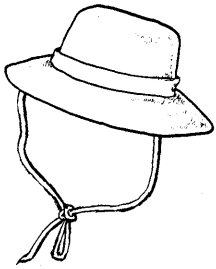
今、「ビデオ屋に行くのはお散歩と言わない」とやっきになって教えていますが有はまだ理解していないよう。一度覚えたものってなかなか抜けないのね…。

圭のリカちゃんは、私の友人からのおさがり…年代モノで他の子のと顔がちがうの。

子どもたちへのまなざし（12）

ある実践研究発表会

松井　とし



K幼稚園は住宅街の中にある幼稚園。隣接した市立小学校の附属幼稚園で、五歳児のみ二クラスの家庭的な園である。その幼稚園で、二年間にわたる実践研究の成果を発表する研究会が開かれた。

午前中の公開保育の時間、子どもたちはそれぞれに自分のやりたいことに取り組み、いつもと変わらない生活ぶりをみせてくれた。私も園庭の柳の小枝でクリスマスのリースを作ったりして保育参加、久しぶりに子どもたちと過ごす時を楽しんだ。先生方も子どもたちも自然体で、参会の人たちと交わることのできる機会を楽しんでいるように思われた。

午後の研究会では、「豊かに育ち合う子どもの育成をめざして――人とかかわる力を育てる」という研究主題に即して、子どもたちのエピソードを中心にまとめられた「友だ

ちっていいな」という提案発表がなされた。その中で『私たちは、子どもたちのトラブルを大切にしています。なぜなら私たちに考える機会を与えてくれるからです』とさりげなく話されたことは、先生方の保育に取り組む姿勢を表していて印象的であった。

続いて二つのグループに分かれて分科会形式の討議がもたれた。テーマは「幼児理解について」と「環境について」。司会者の話しやすい雰囲気作りにリードされるように、参加者はそれぞれ自分の事例を語り出し、テーマについていろいろな角度からのアプローチがなされた。再び全員が遊戯室に集い、記録者から分科会での話し合いの要旨が報告された。この時の優れたまとめによって、研究会全体が高まったように感じられた。

保育の日常の小さな出来事を流さず、話し合い、考え合う園内研修。その積み重ねを主題に沿って整理し、提案する。園の先生方はこの研究経過を振り返り、『楽しかった』と言う。一方参加した人たちは、小さなグループの「膝を突き合わせるようなかかわり合い」の中で保育の日常を、そして自分自身を顧みる。話すことによる、浄化されるような体験が『研究会に来て良かった』という感想になったのだろうか。

教育要領が変わり、保育が変わり、研究発表会のあり方も変わる。やらされてする受身的な研究や研究のための研究とはひと味違う実践の研究、手ごたえのある研究会であった。

（元・幼稚園教諭）

中国のむかしばなし

『なまけもののおかみさん』

― 烙餅師傅和懶妻 ―

近藤　伊津子・編

むかし、あるところにお好み焼屋の主人がいました。主人は商売に熱心のあまり、おかみさんを貰うひまもなく、ずいぶん年をとってから、やっと、おかみさんを貰いました。

主人は、そのおかみさんを「蘭花（ランファー）」と呼び、とてもかわいがりました。

おかみさんは、ほっそりとしていて、とても美しく、ほんとに蘭（らん）の花（はな）のようでした。

ところが、このおかみさんときたら大変な怠け者で、なんにもしないといったら、ほんとうになんにもしませんでした。

油の瓶が目の前で倒れても手を伸ばすこともしませんでしたし、猫が台所の魚を取って

も立ち上がりませんでした。

おかみさんは、もちろん洗いものもしませんので、主人は、小麦粉をこねては、洗いものをし、「蘭花(ランファー)や、おまえは、つかれてはいけないよ」とやさしく言うのでした。

おかみさんは、ごはんの支度(したく)も、もちろんしませんでしたが、主人は「かわいい蘭花や、ごはんのかわりに、お好み焼きを食べればよい、お前の手を黒くさせないよ」と、天にもささげんばかりにやさしく言いました。

万事こんな調子でしたので、おかみさんはすっかり図(ず)に乗り、寝台(ベッド)で横になってばかりいました。もちろん家の中は、もう、めちゃくちゃになってしまいました。

主人は商売も忘れ、おかみさんの世話に明け暮れていました。

このようなありさまを見ていた主人の母親は、なまけものの嫁と、馬鹿な息子に愛想(あいそ)もつき、こんなところには住めないと、家を出て、娘のところに行ってしまいました。

姑がいなくなると、おかみさんは一層、安心して、あれこれ食べものばかり欲しがり、主人は蘭花の欲しがるものはなんでも買いに走りまわり、とうとう、おかみさんの寝台のまわりは、食べものが小山のように、うず高くつまれ、はしのようにほっそりしていたおかみさんは、どんどん太り、太鼓のようになりました。

やがて、もうどうにも、おはなしにならないほどぶとったおかみさんは、寝台から起き上がることも出来なくなり、朝も昼も晩も、寝たままになって、腰も背中も痛くなり、「あーよ、あーよ」と泣きました。それを見

て、主人は「ああ、かわいそうな蘭花や、病気にならないでおくれ」と言ったものです。

一日中、足が痛いといっては泣き、主人が足をさすると「フン！　背中が痛いのよ！」、そこで主人は背中をさすってやるという具合でした。

ごはんを食べる時は、お茶わんを手に持つのもいやになってしまいました。主人は「かわいい蘭花や、私が口に入れてあげるから、いいよいいよ」と言いました。おかみさんは、ただ、ただ食べて寝て、寝て食べてばかりいました。

そのうち、声を出すのも、目を開けているのもいやになりました。

ある日、主人の母親からの言づてを持って来た人が、「主人よ、おまえさんのおっかさんは、おまえさんのことを思い患い、病気になってしまった。見舞いに来てほしいと頼まれたよ」と言いました。主人は、それを聞くと、矢も楯もたまらなく、おっかさんに会いたくなりました。

けれども、留守中の、おかみさんの世話のことが気がかりで、途方にくれてしまいました。

主人はおかみさんの耳に口を寄せて「かわいい蘭花や、どうしたらよかろうね」と言いましたが、おかみさんは返事もしませんでした。考えた末、仕方なく、隣のおかみさんに頼んでみましたが、「なまけものの世話なんぞまっぴらだね！」と断られてしまいました。主人は、ますますおっかさんの病気のことと、おかみさんのことが心配で、頭をかかえこんでいましたが、ふと、いい思いつきが

浮かびました。

主人は、小麦粉をこねて、いろいろ工夫して、二十斤ほどもある大きな丸いお好み焼きを作り、真中に穴を開け、おかみさんの頭を通して、首にかけてやりました。

この大仕事を仕終えた主人は、やっと落ち着いて、「かわいい蘭花や、このお好み焼きは、十日間分はあるからね、大丈夫だよ。わたしはすぐに帰って来るから…」と、おかみさんの耳に口をつけて言ってきかせました。

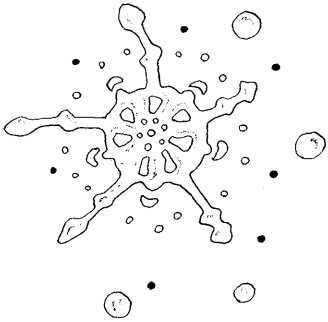
それから、主人は安心して旅立ちました。主人のおっかさんは、息子の顔を一目見ただけで、すっかり病気も治りましたので、主人は大急ぎで、帰ってきました。

けれども、そのかいもなく、おかみさんは、とうに、寝台に寝たまま、お好み焼きも、ただ口の前のところだけ食べたきりで、首のまわりを回すこともしないで、飢死していました。

（かっこう文庫主宰）

（注）烙餅＝小麦粉をこねて、厚焼にしたもの

一斤＝六〇〇g　二十斤＝十二kg



B男のこと

上坂元　絵里

三年保育に入園した子ども達にとって、年中組の二学期は、幼稚園生活のちょうど折り返し地点にさしかかったところである。

子ども達の育ちには、このことは大きな意味をもつとは限らないが、保育者の側としては、少し長い期間をふり返って考える、よい機会といえよう。

早生まれで小柄なB男は、入園式の日、遊戯室での集まりの間も、キャッキャッと室内を走り回り、初対面の担任はそれをあわてて追いかける、という園生活のスタートだった。他の職員は、園児の弟かと思ったという位の幼い第一印象であった。

次男のB男は、四歳年上の兄と比べると、

物おじせず、しっかり者というのが母親のとらえで、どうして走り回ったのかという問いに対する、「恥ずかしかった」という本人の弁は母親にとって意外であったようだ。

第一日目、B男は、木製線路と汽車で遊ぶ数人の横に座り、ぼんやりと眺める。そのうち指をくわえて寝ころがってしまう。自分もやりたいと、手を出すことができなかったようであった。

その後、朝の登園では、園へ近づくと足取りが重くなる。部屋の入口へ来ると、母の後ろに恥ずかしそうに隠れる、母に抱っこしてもらいひと心地ついてから遊び出す、という様子がくり返された。

また、保育時間中も、トラブルになり気持ちが高ぶると、「お家、帰りたい」「幼稚園なんかいやだ」と泣きわめく、あるいは、一人で玄関ホールへ出てしまい、時には外ぐつにまではきかえてしまうということもあった。

幼く見えるB男だが、家庭と異なる集団へ入っての緊張感、いろいろな人がいろいろなことをする、たくさんの刺激を受けとめきれないほど感じとることによるストレスが、園へ近づく彼の足取りを重くしていたように思う。また、玄関ホールへ出てしまうという表現には、ちょっと嫌なことがあっただけで耐えられない不安定さ、それを誰か（保育者）に訴えて、支えてもらうことができずに、自分だけで何とかしようとしていたB男のつらさを、感じとることができた。

そのB男が、園で居心地よくすごすためにこだわったのが、自分の『場』だった。

まず、最初は手を出せなかったおもちゃを一人占めにする。そうすることで、少し安定

感を得るが、今度は、他児との衝突が生じる。衝突に際してのB男は、自分なりの理屈があって、それを妨げられた、だから、悔しい、許せないという、怒りをあらわに出していた。泣き声に、驚いて駆けよると、両手をわきにこぶしを固く握りしめ、奥歯をかみしめてひきつった表情のB男がいる。今はしまったと思っているのだが、その時は、自分の気持ちでいっぱいである。

年少組のB男の幼稚園での生活では、具体的に、何かの場を作るということばかりでなく、自分の居場所へ、他の子ども達が入ってくることに関わる、エピソードやトラブルがいろいろあった。ちょうど、野生動物のテリトリーという言葉を連想するような。

例えば、B男の他児への対し方として、自分より強そうな人には譲り、小柄な人に対しては強い態度に出る。あるいは、自分より弱そうな人しか、遊びの場へ入れないという使い分けのようなことも見られた。

一方で、お面を作ろうとするB男が、保育者のやり方をまねて、自分なりにやろうとする姿、本当に長い時間かかっても、何とか作りあげようとする姿に、B男の本来の力を見る思いだった。

子どもにとって、幼稚園の時期に、現状の人数規模の集団へ入ることが、本当にふさわしいのかを考えたこの頃である。B男としては、まわりが見えて気になることは、どうにもならない面があり、もう少し小さな集団から始められたら、B男が新しい環境を脅威に感じたり、他の子ども達に対して、背伸びをしすぎずに済んだのではと感じられた。

年中組に進級したB男が、くり返しした遊

びに、保育室内の特定の場所での、いす、ままごと用の柵、ダンボール等を使っての場作りがあった。時にヒーロー物の基地であり、おばけ屋敷であり、家であるのだが、その『場』の条件としては、保育室内であること、四方が囲まれていることがあげられよう。

保育室内であることは、保育者の目が届く守られた感じを得られる。また、多くの友だちが気付いて一緒に遊べる可能性が高い。四方を囲むということは、B男の内面の、まだまだ不安定な面、自分の『場』へ友だちを取り込みたいという意識を表していたように思う。B男としては、友だちを非常に求めているのだが、「S君は入っていいよ、Pちゃんはダメ」という風に、自分が仕切ってしまったり、「Qちゃんも入りたいんでしょ」とこびてしまったり、まだまだ人間関係の持ち方にとても苦労していることがうかがわれた。ただ、そこで楽しくすごす時間を重ねることが、B男を穏やかにしていった。

様々な遊びをくり広げる年中児にあって、B男が広く空間を持ちたいという事は、時に保育者の頭を悩ますこととなった。囲まれた大切な『場』故、ちょっと通りがかりに柵が倒れたりしただけで、B男はひどく怒る。おとなしい子は、その見幕に圧倒されて、B男の顔色を窺うといった悩ましい問題も出てきた。ぶつかり合いを避けてしまいがちな子どもに対しては、保育者が、気持ちを代弁して伝えることで、B男の怒りの表し方も、少しずつ調整することができるようになって欲しいと、働きかけてきたつもりである。

もう一つ、印象的だったのが、B男とA子

の関わりである。年中組から入園したA子は、とても背の高い女児である。一学期に何度かB男がA子をたたくということがあった。A子は穏やかな子で、B男がなぜそんな事をするのか心当たりもなくとまどっていた。

五月の初め、B男が、年長組のまねをして廊下にダンボールでおばけ屋敷を作る。年長さんのやり方をよく見て、材料を要求し、自分なりに作っていく様子に感心。そこへ、たまたま、A子が入れてほしいと言ってくる。B男は、殊の外うれしそうで、その日、母親にもA子と遊んだことを報告している。

私なりに思うのは、早生まれで小柄なB男にとっては、A子が長身だということがとても気になった。そして、大きいA子に手を出して、自分の強さを見せたかったのではということだ。A子が「Bちゃんのおばけ屋敷おもしろそうだね」と言ってくれたことで、B男の気持ちが、ときほぐされたのではないだろうか。

B男の場合、自分のまわりを見回して、理解したり、感じとったりすることと、自分の気持ちとしてわかることとの間のギャップがとても大きかった。今よりもっと大きくなりたくて、今の自分らしさでいられなかった。そして、幼い部分のB男が育ってきたことで、B男自身、楽に楽しく、園での生活をおくれるようになってきている。

保育者とB男との関係では、B男に対して「たたくのは困る、ちゃんと口で言ってね」「少しがまんできるといいんだけどね」と言い続けて来なければならなかった。けれどもその前提にあったのは、その時々に、B男の

気持ちがよくわかったということである。

一生懸命、話してもなかなか伝わるように思えなかったことも多かったが、最近、私が思っている以上に、こちらの言葉をしっかりと受けとめてくれているB男を見出すことが度々ある。

最近のB男は、まだまだ怒りっぽくて、少し恐れられているけれども、かなり友だちに好かれる存在となっている。

これからは、良きイメージリーダーとしてのB男の育ちを、ますます期待したいと思う。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

編集後記

イギリスから〝春の便り〟が届きました。日本の、もやに霞む、うすい桜色の春とちがって、暗く長い冬を終えたヨーロッパの春は、一斉に花開く、色あざやかな花々の色彩でうめつくされているようです。

＊

四月から新しくスタートする連載をご紹介します。

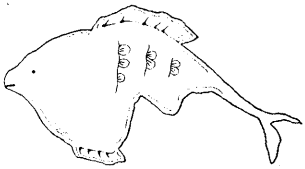
無藤隆先生の「トポスにおける発達」。子どもが、日常関わる特定の〝場所（トポス）〟の中で、どう変わっていくか、という発達論です。六回シリーズで一年間連載します。

もう一つは、原口純子先生の「園長室の窓から」です。普段、何気なく行っている保育の中から、子ども達の行為をどうとらえ、何を大切にしていくかを、具体的に考えていきます。若い現場の先生方に、是非読んでいただきたいシリーズです。二年間、十二回連載の予定です。どうぞお楽しみにお待ち下さい。

今月号より、編集主幹が本田和子先生から田代和美先生にバトンタッチされました。この新しい出発にあたり、編集部一同、心をひきしめて、より豊かな雑誌づくりに取り組む所存でございます。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

（K）



幼児の教育

第九十四巻　第四号
（一九九五年四月号）
定価四五〇円（本体四三七円）

発行　平成七年四月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六〇四
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

第21回OMEP世界大会

（世界幼児保育・教育機構）

とき：1995.8.1〜8.4 ところ：パシフィコ横浜

世界の保育者と語り合おう！

保育者に国境はない！

大会テーマ

いま、人間を育てる。ー子ども時代の充実に向けてー

大会内容

■基調講演 N・レマオン（アルジェリア） P・フレイル（ブラジル） このほか、仏、スペイン語圏の代表的な専門家が来日。

■小講演『世界の保育』シリーズ：アジアの保育・アフリカの保育・先進国の保育等々を紹介。

■緊急報告 戦争・飢餓・貧困地域の子どもと保育：北アイルランド・ソマリア・リトアニア・カンボジア等からの報告。

■分科会 変化する時代の幼児教育・保育の質の探求：ＥＣレポート、各国にみる国際保育・保育サービスの多様化、家族支援策と保育者、AIDSと子ども等々。

■世界の子ども歳時記

■インターナショナルの夕べ

■展示・ビデオショー

OMEPとは

OMEPは世界幼児保育・教育機構と訳されています。第二次世界大戦後のヨーロッパで創設された国際機関です。現在、アフリカ、北アメリカ、中央アメリカ、南アメリカ、アジア太平洋、ヨーロッパの６地域にわたる60ヵ国が加盟し、ユネスコ、ユニセフ、ＥＣの諮問機関として世界の幼児保育・教育の振興のために活動しています。

■登録費 25,000円（1995年４月30日までの納入者）；30,000円

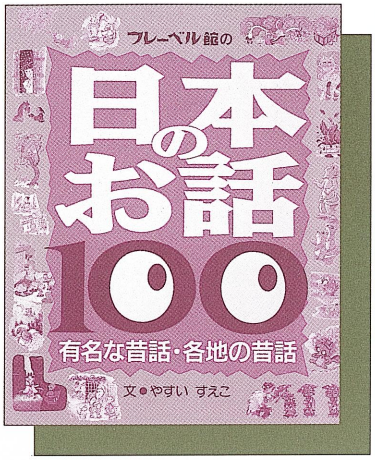
■参加予定者 国内1,500人，海外500人

《お問い合わせ先》第21回OMEP世界大会事務局

〒336 浦和市元町1-8-21-102 ☎048(883)9670 FAX 048(881)2420

（事務時間 月・水・木・金： A.M.10:00-P.M.4:00）

主催▶OMEP日本委員会 協賛▶日本保育学会・全国国公立幼稚園長会・全日本私立幼稚園連合会・全国私立保育園連盟・私立埼玉大学協会保育科研究会・全国社会福祉協議会/全国保育協議会 全国保母養成協議会・日本保育協会・全国幼稚園教育研究協議会・キリスト教保育連盟・日本仏教保育協会・幼少年教育研究所・保育研究所・幼少児国際教育交流協会・東京都私立幼稚園連合会 東京都神社保育団体連合会・東京幼児教育協議会・全国国立大学付属学校連盟幼稚園部会 後援▶文部省・厚生省・外務省・UNICEF駐日代表事務所・日本ユネスコ協会連盟・日本ユニセフ協会 神奈川県・横浜市



日本のお話100

- 子どもたちに読み聞かせてあげたい100のお話(日本版)。「さるかに」「かちかち山」「うらしま太郎」「こぶとりじいさん」「したきりすずめ」他。
- 一話一話を読みやすい長さにまとめ、美しい挿し絵をそえました。
- 子どもたちの心を育てるお話の宝石箱。

文・やすい　すえこ　絵・若菜　珪／石倉欣二　他

A4変型判・352頁・定価2,200円(本体2,136円)

世界のお話100

- 子どもたちに読み聞かせてあげたい100のお話(世界版)。アンデルセン、イソップ、ヨーロッパの民話他。
- 文化の歴史が時間をかけて培ったお話が、子どもたちの感情を育てます。
- 美しい挿し絵。読み聞かせしやすい文章の長さ。

文・やすい　すえこ　絵・村上　勉／太田大八　他

A4変型判・352頁・定価2,200円(本体2,136円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館